子家物語評判　巻廿三

和書門
類　一六〇六八　號
函　一八〇　架
冊　二四

内閣文庫
和書類　一九〇六八　號
冊　二四　函　二〇三　架

内閣文庫
番號　和 16068
冊數　24（23）
函號　204　6

国立公文書館
National Archives of Japan

平家物語評判秘伝抄巻第十二之上目録

重衡被斬
大地震
絹掻
平大納言被流
右伝房被斬
判官於義
吉田大納言伝説
六代

浅草文庫

平家物語評判秘伝抄巻第十二之上

さうほうじよりこの三位中将重衡ゑいとば
さうほうじよりこの三位中将重衡ゑいとば
将殿の家義よりあづけられてゆきしかども
伊豆國よりおくりしかども道すがら大衆類よ
申けれどさてこの三位中将重衡ゑいとば
信濃の孫伊豆義人夫形部よりゆきて
終よりゆきてもゆきまれけるかの
うちへハ入られぬ大津よりすぐ山科道よ
醍醐路と經てゆきハ日ハ行ハ
小方と申ハ名ゐ鈴中納言惟實ハ廿五條

大納言殿の御乳母大納言
伯局とぞ申しける。中将一人
ぞ生捕られ給ひしかば、先帝は
かりけうの壇浦へぞ流れ給ひ
ぬ。武士の中に、さよ殿と申す者
姉の女房三位殿と同じ者にて
ありけるが、二位中将の御の命
惜しさに、まづ海へぞ入り給ひ
ぬと、宮の御乳母大納言
殿の御前にぞ申しける。
ねんごろと今一度、
けれどもそれもうるはしく
入り給ひなんずるぞ。
守護の武士どもは小宮
殿の御情なり。
言恩深かりしかば、一人の
世よりもいとしく
中宮の御方へ
面して後生の
ハいかに宮ハ武士どもと
ゝの間とうらめしく
ハ何か苦しかるべき。

三位の中將聊かのごとぞ悦ばせよ大納言佐殿の
御消息をもつて三位中將殿へ奏聞す奏聞
御遊さてあるべきかの見參よりこれ
をきいてあるべきかの
わたりやうやうとうちとけ出でたまふ
へだて置き給ひ鳥帽子着
男の心緩くうちとけたまふ縁よりとかの
そのうちけの小宮御簾の内さはらぬ出でたまふ
しやうの袖をうちかたらひ
ぬるとて宮けり
はるかに宮殿のよりはなれ
はの間しく大納言佐殿の心消果てぬ

三位中將御簾折被
書樣第四一名
罪の報よやはあるべ
とさてそのうしろ
ぬ
いかにしてかうはぬ
思いつるよ今は
世よりいとまを
きをよ
為よまうぬ
心を

しらくに額の髪とりさけ口の内をみれば
歯こうしてくろくまなをとりてよ御覧ぜよとて
まろとおぼしき方をまゝ笑ひ給へるあり
けりうつくしう今一入ありしいとやうやうさめ
引うづくまぬ御ふ良ふくしく方目と
ゆかしくて宮ぬしの二位殿の御あり三位の上
の御ぐしよりあとの髪ぐしまでうつくし
ゆうせよとおぼしめしたるうつくしう
うつくしの家と今てなんらうしこえたりやと
思しくこうれ憂うげなりけるとやうへ
うれ今よくくうつくしの若やとおぼ

しまつる物と為ばかりとうぎうしてい
らん変ようとて青今へ給へるしく宮通よ
なくくしくて書せめ給へ方の面ぬ
よ御家人ちほうくしくりうよ
とくく祇の小神よ御衣とうくて出さ
ようと中将を着給へ
の御装束とぶ給へとて後よ御覧ぜよ
とてぞりうとおぼしめしたるうつくし
よくはうくうくぶくうさ業へわたて
後世やよくく人形えて給へとくく御覧と
出されうう中将御ぶくと書給

ものうらうらと。後の
世は暗そ入あうう。ゆるの
長と今ハ行うすんぐ上と限の信とおりくハ。
ちうちうとうつうバ後世ようふうぐぞとれ遠
ものうの。一蓮ようとて祈ぬ。
なるのくしちとくのくじ武士しどの信ん
ども心のくとくくしくしくれぬれば世ち中将
の被ようすぐるようのやきぐとくけ
ぬくハ中将恩のうちとぐとくおくうう
ようとくれ終ようハ存くく墨べき
ものくしぬぞくくおうひ切くぞうれけり。

被ようよ世ようくく遠ちくく変しもそ限と思
れけきぐ今てなそ毎くくハうれそ
ぐ心よりうくくバうるのくしくくくく思うくく
ぞ出くくそけうハ小百ハ御簡の外すくし
ようりび出くくうくくけびぬひけう御
あうくの外すぐ書ようえけきば。
中将間ようくくくくくくくねぐ語と
更ようやうぬりとぬすけう更繁
くうくくくハ悔くぐぬうれけうう
紙曰。うくくくくの後の世ようくくべうの。
わうぐうう意ぐゆうくくべきとややしよ

うよつてさるべきもの。ようとて。よりのさ
ぶらに。京都へ云うひるき
よ。尚かとぬ。ぬ。こに上野人。平氏一方
へ大将軍。うあ人。敵のまよ因幡後
よ。信てかりる。ぬ。こ。ぬ。ぬ。
後へ物。うとなしん度とち
うとぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
れば別のうとしく書。軍へ。ひ
よ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
へ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
しのぬ。ぬよりぬ。ぬ。ぬ。

ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
今ハ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

ゐくらの〻と練うちてくどん又憂し爰つくるも
爰人わかるれぬさうる心と〻ちれこそ
勿論業人竟〻と弾しこそうる。
ありよ竟執やのしるもそひ竟
竟潮のしかくぬ爰めべしぐれば
小方別人付よ信徒よりと蔵よれ
つくられと想ひひ小方ぬしの
ゐこと悟ねてびうこんとし人
しもこそ竟ゐるる。石仁人竟よ
ぐうひ爰よ陰世人人。所ゐと凍し弱人。
次ゐ小方人ぬるうひ。賢臭人ゐよあ

ぐれば歌うくしく実人名と応ゐる
昭人しゐ人賢臭の像ふれむ
くくうとちぐと清くぐうしよ
ゐこ別人ゐ弱かん変八海よし
ゐうくしづこ方ゐうる竟強
ゐ人心ゐくがうゐ弾よ信ゐる和と
ゐと雑や人人のゐよう階づくれば
実行こうる竟こうゐうれしゐ八
又心得ゐなくしゐんそう
ゐ人だれこと潮とうひ練爰ひる
練ゐよこくと悲竟ゐ。ゐれだ。

文治元年に平家を助け奉らんと家々に
五百戒の中より第一殺生ととしたる
上古は実上人あり一人の御弟子
なりと既よだ法道心と申すと
等なり故に平氏の数万
と上を御ハ父の命ぬけ出ぬ
と奏ぐ給ひしや所ハ大臣
の行を御ものときさんや
奏上ハ此帰ハ
乱の御ハ法道
なれば平氏より数万の院

落行ひ給ひ已が心とこそ
代と逃ものぬ
りく報ずるに
して既に
社ハ敗乱
世ハ
此捉と悔
毒害ハ大悩
旋律と
天ハ滅

陳文雙言のい恩と
出家ハ
寺
上
限じ既に法
法
悪魔
慢修羅ハ
戒法と
都
上
家法と

ぶつぶつとぞ云ける。沙門は他を導く家なれば。既に主を卿。羅睺三位の位階よりも勝れたる人なりよ。沙門の家よりも是を尊ぶべきなり。沙門のあるべきやうは。大法をもつて是を免ずべし。凡人の法をもつて是を罰すべからず。況や是を罰すべからず。況や是を免ずべしと。大衆紀伊守。大衆よりも罷れ。なのさまの。しかるべきは。天竺震旦の高僧。六祖。恵能大師の。死骸を棺に入れ。御墓と云。為溪。天竺の首座とぬすんで。百十貫よりも是を奉る。所詮地獄の業とぞ。

沙門の法をもつて大衆曰。仏法は邪を罰すべし。邪を罰して正を助くべし。況や是を免ずべしと。況や人悪仏乃至入者多しと。いつぱつ。仏法は免ずべしと。上仏の形像を五逆の罪人と。終に助くべしと。況や是を免ずべしと。極重悪人を。他方便と云。或人疑曰。妻帯経曰。唯除五逆誹謗正法と。如何ぞ是を罰すべしや。答曰。善罰と。罰と云。是仁者の大罰。疑曰。然則。

りくこそ不と都化をまた天ハまと生ざさ
ずして悪人を罰して仏法の罰ハ
先天行うるとと悔ゆ先まるうら
行者の大罰し
知ずさらざよ案うるへ
結曰善人ハ信ずれども死と速よ謙
ずして仏を逆しハ知ずして死と諫う
うらよ佛まの逆の意ることを
宗鑑最後よ仏をこひ祈
結曰それ所終ハ八百の聖教を
数の仏像と祥すんよりと正定とりく

宗くこそ祈りよさらざよ罪ゆ
仏とりがやうしとハ何ものや仏ゆ
先佛経曰即心即仏又曰思仏及衆生三者
差別何ぞ外よ先とりりんば先
悪うよ地獄やゆ祈よ意心の佛
の多よ網とすくひ人を救ゆ
先一ら人行者ずうれ
鑑ハ平氏のもよ
うらかしそこよりて一方の大将軍
わ意ずんしぞ所よ所ぐうゆ
逆即先頂北文心所よ銘ぐうゆ

然るに、ハ如行で煩悩即菩提の覚見より
通徹一切の諸仏や。色文却々迷ハ色
迷頂ハ色ッ〻と云て。いく〻迷即色頂と
云て。或人疑ひて曰。云て劇の所終金
剛心と云ふ。いかゝ。云ふ心ぞ。
答曰。如実知の時ハ瓦礫と仏所。凡夫ハ
ものゝ一切統法ハ
仏と知れ。答曰。即心即仏云ふ
開覚すれば。瓦礫風ふきて仏統仏統
よ。学を劇ふ〻。自罪業と悔て。凡
夫ハ〻却〻仏とりし。豈色統石と実相

と云ふ〻と仰ん。や。色凡情実体
同ハ人よ。疑ひ〻曰。主劇ま仏の仰
て恭敬礼すると。色凡情実体と迷
よ出離し〻人よ。一代教主ハ釈尊し
頭小西西右脇即。最後最上の金剛色仏
と統ふ〻。他力ハ教ふ〻。仏言
慈悲ふ〻人よ。答曰。云ふれハ如来唯心の
ふ〻。色ハ〻ハ〻ハ方と同覚ふ〻。
角度ものゝ様ハ心で経曰。若色と
ふ〻と見ふ〻と云ふ〻と求
じ。ふ人邪道と行で。如来とふ〻

あるじと語らふ。死して色却くに仏意より
遠ること十万八千由旬。何ぞ傍らに天地震動
しく。空中の音あり。一人現じて曰。汝
法を惟考し隨演說すべし。いまだ法
八字を説かず。今安楽の却くに色とする
ことなし。黒白の二玉と出して示す。
時に女人問ふ。何ぞ宝珠入滅
を語るや。答曰。善男子
心行不滅と色又言語
心行不滅と色又言語。即今喫
茶。
忽ち消却しぬと。女人阿可

しも言ひ。何ぞ言ふ。
答曰。
ゆゑを達せしめ
ん。
頭陀と色語らん
とて、
頭陀曰。信ずべ
絹擂ぎ法
同八日二十二日。雄文覚上人。敦左馬頭義
綱入道。
首よりけ。猛田兵衛尉
よりけ。在空東
四月十七日。

蟹。そのころ髑髏と一つ船出して、白き布にてつつんで、えこそ放たざりけれ。義朝の首をば、さらしけるに、ほどなくぞ、一族・叛と聞こえしかば、命ばかりは、助けられけれども、今又、義朝の首と信じて、さらしてゆくに、義朝の年来召使ひしかば、平治の後は獄舎の苔の下よりも、後世弔ひ人しとて、大理より付けられ、中務丞・兵衛佐・信濃・人々、おのおの落ちの下よりとの時の人々、又世に出でて、君の御恩、国賞等、こと新しく、かたじけなくぞ、下されける。

男しは、よろこびの涙、袖を絞りけり。

今日をぞ、通憲入道、こと、こそ、こと、こと、こと

と伐掃くに彩なる塔と造り白父の
御為とくるしく勝長寿院しく號
せらるる家なりとて宮
て故左右の引義の人の墓へ門大臣正二位
と賜ふ勅使は左少弁重忠とぞ申
さる彩なる戒壇の名誉もすぐれ
りよりつくるとこそ。家とおくことのこそ。
亡父の墓よりく勝宮殿勝信よりおくべぬ
こそこそこけ
源日文覚上人伝義経寿七日侍所の図
よく闘諍と一門と出る義朝の家

なるより宮くに彩なる塔なる
護所首はよりくの頭ふわるとー
いくるもくるくるもの彩ぬるいぬ時よ
文覚彩なるふるせはるるいくるもの
なる実なるとるるるなる実の彩と
見出るまるるせるるるるるる勝
ぬるるるるるるるる絹撞の男の志と
わるるるはは亡魂の誉執とるるる。
又は彩なる義祝とるるるるるる便るる
ぬるるる変一方なるるる巻るるる仰る。
彩るる文覚の心中るるる心待はるる

しくそこで自分の初穂をひのもとて。
祭るのまつりせんとあるべきこと。
教小所をもつて文覚孫勝の人のまい
りこしたるを心中より人の為
世の為とてこそ私穂と見と
せしをたつるをしまわるべきやまれば
人のことぐさなりなさたふれる
しとこそ世の為人の為と対私穂
とこそ世人は必ずおかるる後
よ孫勝のりしものなよ慎べき
ものと守るべ沒よ形穂の文の意

とこそんよ千とおの人と信者しるる
いつしかうべしやうべ迷いさの人
うべしばそれ人らてはなしの文の
形見といいぐ石のようとまよりて礼拝信者する
文を巻の志の深切なる故なり。
されば未世の人おの聖賢教行の
とをとこ人を勧めて文
句よりくを自ぐ人註解とをして。
却くく聖人の金言と識と類なり。
子曰父のくを志と観父没しその
行と観三年父の乃とひのうそんで

孝と編げしといへり。此詩よりして世人
の孝者迷てものさ。先より人の孝すべし。又
ものを背いそむきと見。又没のうの時に行て
とうとうとうよりおのおのの孝義に背かず
するもといへり。三年法のうさと孝と
をもつてよりおのおのくに背かざるを孝
なり。此事氏が説又明すべし。藤氏
が註。又孝すべし。此詩よりおのおの
三年の文句よりかくのごとく孝の志
の深厚なるを感じて金しそれ人を
心よりぶらるものにも感心せざるものと

分よりて家よりたたくく
くくしくしく父母孝行の志深くるは
此文句初のわるくるとぞ。なほ今一つ
のくくとりくくもとこの句。それ人
としけくくも職異福の遠くくくも。
忠執意義の心なるさ者のくくぞなほ
又母のくくも意義のくくくてん
孝の此人よりもれるすべ。一日作時の命
けくくるとかくこうの句くくどもとりくく人の
別るべ。彼人の孝くくも墨くくる形見の
ものの。種種おのの千草の花よりもそ

きりのくうりうん変をそ歎深うあ
ものしかばかの父母とおもひ
ゆうの時はいかでか命をすてん
命をおしむ人のかぎりかの人の
やうにあらんと思へばぜん
とうの故でのしやうをかへりみるよ
ちうどうの人の深き恩をたづね
ちうどうの人のよりもまして又聖人の教
ほとけ三世の諸仏の
をしへをたづねんとおもふ
心をおこすべしとぞ
いつて此時はかの志をとげ
ずうりうの恩をうけ
ちうどうの人のよりもまして
ゆうの時はいかでか
しらんとぞいつてかの
父はこれをきいて
今ぞ
しかるべきまことの
孝子
と
執行
ありがたくよろこびて三
年八月
家
我
世
心
変
時
事
者
孝
行
孝
仏
聖人
仁
孝
礼
聖
聖人
聖人

ぎりをとゝ結解するゝれ。但自勸
学人士夫。一切人文学。
難知わゝ。意の文学。
とゝゝ。多已。
時心明ぬゝ。故。百法人事非。自未
發明ぎり時。貪慢他の意と知
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ義ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
文ゝの恐ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。見の君ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ぐ。天心必ずしも免じて人亦いんでは
徳よくまもるべしや。維義経逆心をもつ。
き魂物わるハうつ伝ふ。徳といく
人とのくらあるべし。いんで現在ハ弟と二人
ずく殺ずるやうれし兼ねの中。兼ねの
よ命ずく逆心のもつ命ずうけれで徳
とりずく治ずく終まき害ずるれども
色ハ古今為有ハ聖ものず。朝ずる
ハ聖徳わるずおハとく色と一緒よ
殺ずるよハどず色大ハ有ハこと
ずずれとも作場よ縁のて上世

らずるもし善と悪ハ
下ハ強動と云ふ義文対りしもし
きくしずくハ作場ず動悪ハ
ほずとも動ずず軍ハ方便と定
らずるよずるず絶ず縁九けずけ
しずず一ハ自ずず動よずて現と
ずうひずるもハ欲と対偏ず者
偽曰文治元年九月十二日。梶原源太景
季、始ハ場ハ治し平氏源罷ハ家
ハ治ずず。内ずハ義経源頼
の用意ずうハずと。山ずず

あるに梶原景時経正を最上とすべしとて、不覚人にはしられぬ。後一日と経て、武蔵国の住人、熊谷次郎直実、経正を最上とすべしとて、梶原に十日と申す。経正は、三日と経て、又最上とぞ申す。後三日と経て、又最上とぞ申す。彼三日の間、経正は、敵に会はんずるとて、色を変じ、涙を流し、行歩運ぶがごとし。上代の人の、義経の御

辞宴のさまを申すに、彼の経正のごとくにこそ、唐土にさぞ、さぞ、ありけんとぞ、思ひ遣られ侍りし。幸ひ小悦に申すに曰く、人は一日食せざれば、一日の眼ぞ、ん、はは、色変ずるとぞ申す。況んや、不覚人は、一日の内、一時の間、ものを思ふこそ、いとしけれ。申して、詮なきことなれども、後世菩提の為に、速やかの記を上るべし。経正は、ただ、管絃の道、しかるべきにこそ、ものしけれ。一往、彼の経正は、優なる長にしるべし。一往、彼の経正は、達者とぞ、なりぬべし。されども、上は、ただ、ことに、秘密の

命ずるの次第は策うるもつとも
家ならへく。一来とれるもの
大津坂本の名ゝの陳しくたんを
へ検見とつゝりて書よへく貴へつさる
しく義経の七郎人よすぐれ弱ひ
義盛弁慶うすとこちら人のゝ
うのゝ家ならよえのゝ
し家ならへうどんへぐのさ
りく流川へ申入命
と申く家ならよ在く
曰孫八周密うゝと

と知ゝとあるの勢と討りゝ部て
為もりうぼくれけ者ゝこの
判官西後とあゝれゝ
ゝゝ変
頼曰芝小智ゝうゝいう
義経ゝ対ゝ命ゝ
阿時ハ西後ゝ者ゝ
ゝゝゝ用心ゝ
に及命ゝゝ
ゝ小。部ゝ種義
へゝゝゝ上ゝ者種義
と知ゝ部ゝ
為ゝ
判官
ゝ変
頼曰芝小智ゝ
義経ゝ対ゝ命ゝ
阿時ハ西後ゝ者ゝ
ゝゝゝ用心ゝ
に及命ゝゝ
ゝ小。部ゝ種義
へゝゝゝ上ゝ者種義

しく然るべきと申せば。親方はいなかりしが。
扨かの色男へ入魂礼小仰せられ。親方
の後小詰れば。扨よし仰せられ。いくらも
今宵後害しの為にまゐるとぬ。中まゐるとぬ
なれば小一往は免し申されけるぞ。案ずるべ
ぬへし
翌日。弁ぜる義ぬる。判官入魂くに申げるに。
今入法師がそれ性と見いるよ。一宮対は
小向うとは存ぜぬ。有おれ入師し。誓戒異
恨よ見えいと申りれば。判官宮げるに

彼ぐ必門よ存ぬ。神ぬ向ぬ。それど
数通入親族文と書物ぬ。すると申て上。
命尾よ弱と刎づさんぬ。ぬぬ上縁
なるば。然一人と向ぬ。変とぬ向ぬ。
彼ぐ宮ぐ東対よ来向ぬ。若門えて
答ぬと紐ば。歌換見と付く窺ぬし
ぬ向ぬ。敵よ門入姉と密ぬ。
ぬぐよ答と拙。彼ぬ陵方ぬ
打圍ぐ。ぬぐよ入ぬとあげ彼
ぐ気とぐぐして。急よ先と対向ぬ。
と宮げれば。弁ぬ。乞縁宮ぬ加

ぬ。欲事ハ必利ありぬ。まことに必利
なりと申ければ。義経。義盛よ申けり。
弁慶ハ心得ぬ。心得ぬ。宮。義盛義
て。事ハ兎角とり合ハ対ハ。若
正後部ハ。実ハ。仏門ハ軍兵
ハ用ハ。なるべ。義人。命義ハ
ハ慮ハ。命ハ。此義ハ。ハ命
ハ。ものハ。ハ。
正後部義文と。義ハ
部日。兎不後ハ。神ハ。ハ。
ハ。ハ。且ハ主君ハ命ハ。

命ハ。ハ大功ハ。ハ。
為ハ部義ハ。ハ。ハ。
ハ義ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。

判官義経よ名乗あるべし
経曰。此大将人名乗よハ名乗とも
無名乗者と云ハ
御門より賜ハ平函者ハ
ばくよ紛れ
ばくハ陽ふづさ
敬よ命ハ此付者
よわ〳〵と位付ハ
ハ付と云〳〵大将名乗どんバ
れと書要と云ハ
命〳〵〳〵ものし
平後取わ〳〵ハ捕〳〵

経曰。是敬と経と敬よ計
られ敬と敬ハ
敬律と云命〳〵
曰。門を出〳〵〳〵
天道と看と。是
ハ経文と敬よ
〳〵あよ軍と用〳〵
平後起結文と偽〳〵
経曰。始よ偽〳〵
後よ起結文と偽〳〵
わ〳〵〳〵れと

経と〳〵敬よ計
〳〵千里と偽〳〵
〳〵〳〵〳〵〳〵老子
と看備と現ぜ
〳〵〳〵〳〵変と
〳〵世ハ武将わ経
〳〵〳〵〳〵〳〵
〳〵〳〵〳〵〳〵
〳〵〳〵〳〵〳〵
〳〵〳〵〳〵〳〵
〳〵〳〵〳〵〳〵

先ニ初ニ宮ニ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ

とゝ史記にと書給へる。也一位ハ元
八忠義八為ぬべし。それとも野ゝ。
強信忠信義と思ふ事
難しかし却てわれよりハ記文ハ
よ者しと書曰門よ信あるく外よ着こ。
然バ仁ゝ記法文と書給へるハ
毛詩よ忠敬るく已よ信あるさなとなよ
天能業ゝ
判官緒方三郎惟義と形ちんゝ者池
三郎ゝ直と斬れし変
緒曰。不義不仁ゝ事と者ハ

情ゝ。云八為よ忠功と仕ふ者し。為
八難と通りんゝ撃八多さと形く。
忠功ゝ記八ものとゝ
くわ遠ゝ。郎従八右ゝ
上惟義ゝ
命ゝのゝ義よ義経よ
ゝ忠と
ゝ申上ゝ
ゝよわゝ
ゝ申ゝ
ゝ也と申ゝ
ゝ隨べゝ

中ごろのまれびとの経ハ世ゝと孫勇功
と爾つさや所よ義経惟義を移給り
とゝ。彼が事方よ行ゝ。東地とゝさされ
けゝ。ハ地。こゝて上総と避功と遠ゝる。
かゝ右徳ハゝゝのひゝく経ハ有ことを
遠ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ公日。仁王ゝとゝ有ひ。給
しゝく侵。被ゝゝとゝ。ゝゝとゝ。ゝゝとゝ
義経ハ義国ゝのゝゝ。義経ハ強と思。給
西ハ者ゝ。義経ゝ隨ゝ院宮と給ゝ。支
評曰。事勢ハ強と思。給ハ乱と思給
ハゝゝん右位。ゝゝ上西の武士義経ゝ隨

ゝ。ゝ。一旦ハ事勢ハ乱とのれ給ゝ。ゝ。
ハ乱ハゝゝ。ゝ。二度ゝゝハ強初方
民の煩ゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。義経ハ心と恐給
ゝゝ下ゝれ。ゝの院宮ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝわゝゝ史記曰。力と備者ゝゝ掌ゝ。
ゝゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝと。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
大西大島牧基。義経ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
緑曰。ゝ。ゝ。ハ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
わゝと。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

まつさきかけようぞ。初陣とぞ
欲と縁く宮ぞしける。早速馳参て忠進
仕るべきよしの
判官申給ひけり。十餘人の少と具せられけるを
平三郎兵衛尉宗清ぞ大ろうの
よ進ぜける。傾城傾国の美色をもって
をさまる。素代の人主。ちかく
住ける神官の安房と情ありて。京へ送
られけり。仁の小綱より仰ける。宗清に曰。
側隠の心は仁の端しなり
如隠の節時況。義経追討の院宣とぞ下されける

結曰。これ宮院宣ハ下の逆徒と退治
せんが為。結ぶ人大将とつくるよ
て。ぞ将よ命とりし人民と為ぬ。
将の威と長せんが為。命よりし院宣
とくだりし。ゆえ義経よ
せんと下されける。彼逆徒
て欲しハ。ゆや義経を先よ
背。不義と変とし。人のおのに
義と。不義よ。はなく院宣と下され
けるぞ。古今の礼。為庭の旅
とぞ。院宣と下されけるぞ。

坐の形勢悦ばるべきよしなどぞ申し
何を給へと給はるべきやうんぬ
よや小除目の御時政形勢の代官と
しく下給はるべきよし義経行家義盛進
討へ院宮と申されけりよ十日と経
ぎりよ文義経と討へ院宮を下
されけり。是一天の法皇へ縁言
よおさめ。投曰。法皇の御心入形朝
と義経お殘りしめ人としよ上
下王制よ場とづくさうへ縁タベし
それよよくくも四義よ此ど去曰人

へ王とくくハ賢と上とくくハ不肖と下と
しく諫信とくくと暴乱と禁書修と正
吉田大納言沙汰
朝臣ハ惣追神使と称くく法制よ
兵粮米と完行つさ宮義国ハ変
諸日形勢平家とうぼ諸ち
切代よ異くく紙くく色家歌と退
治すんうあく家歌と退治ハくく
八幡と安しきくく形勢
居恩をあくくんであ曲よ用色お代赤
国へ義道くくれど天運ハと称ち

よ所者てゝと係ふ
後世の乱しめべらぬぞ
惣追補使とし
と家しく百姓の為
時ハ色外ちよ細
よ戒となすべ
らさぬ人さ
と論ず。儲主摂家の長よと申
なんくてゝ将軍とそ
自ハ下後くく天下の
正政と行ふ色則百代の忠信名将

ニ世ニ者ハ彩色と私
ふ大さうの花色
法皇古例と引ふ彩色申る
よ御くく金議せらし
ひれし小人所人の申
人くうれハ論せらよ
田大納ハ少長とな
所ゝ心ハ審
信日彩色毒蛇中の
所大納ニ者ハ

自分ハ自分ハ
ふ事天下の
くく天下と治ぐ
る色を養す
ハ色外ちよ細
ハ人の
ハ己が分
と申り
ちくもの
て。
代の忠信名将
ハ自分ハ
ふ事天下の
くく天下と治ぐ
る色を養す
ハ色外ちよ細
ハ人の
ハ己が分
と申り
ちくもの
て。
代の忠信名将

よ彩色と私
義し
ひ彩色申る所々
ふ所々の申
ハ色。
ハ色その
ハ色ぞ
ハ色ぞ
ハ色ぞ

[illegible]れうとしたく。中[illegible]
[illegible]又孫と[illegible]
[illegible]つゝさ平
時政平家の[illegible]討罰[illegible]
評曰。[illegible]の不德[illegible]の制罰し。[illegible]法曰
[illegible]人の任なのんで[illegible]の[illegible]
や。仁德[illegible]
わんや。[illegible]平家[illegible]助[illegible]
[illegible]
頼朝の威功[illegible]平家の[illegible]長し
[illegible]と[illegible]天下の

[illegible]平家と[illegible]即平家とうつぼ
[illegible]曰。六國と[illegible]
[illegible]六國[illegible]
[illegible]平家と
[illegible]
[illegible]
[illegible]

天下をとりむつぶ。況平氏の郎等なるをもて。
何ぞ誅戮を加へんや。義をよりて縁の意
しく信義をもつて心とし。若逆心を
くしさしたる者をば。慕ひ参じて歎する
者多し。わづかに逆心を忠進せむ
面々賞ハ功によるべし。況やこれ
制禁と出さるるに。よるべきハいうんぞこれ
良将ハ言ばを面々に
形勢を人よわ心をそ。短なるものい。
そ代し亦短しを公日。異人の政ハ人と
隙生るに。聞とりくしに。聖人のまるべき

人と隙生るに心とりくくを。聞に隙る則ハ
りくく始と縁面くに心に隙る則ハりて
終と保面くしくを

六代ろくれくし変

評曰。世万事奇異なるさ成し。
一ときの間なるに世雲音なるもの。
くのぬやくくし天命と待くく一度大歎
とかつぼ生べきさ勿論なるに変ぬに
やこちくおかしくれど
色ハ千差人に秀ぶるとの及ぶに明ど
強に形勢ハ強歎なれバなびくこと

心のうち[illegible]なれば[illegible]より[illegible]の[illegible]
よまるゝなり又[illegible]
六代の[illegible]より[illegible]
の憂悲と[illegible]て[illegible]
くもゝ[illegible]
撰[illegible]
紙[illegible]

毋上[illegible]数と[illegible]
[illegible]
語曰六代の心[illegible]
嬪孫[illegible]
と金[illegible]
られる[illegible]
嬪孫[illegible]
[illegible]人目と怪[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

りいうんぶつとや孫よ
世人のなげいたりしかば
青侍五郎青侍ゝるよ青
付乘りしに信志田
明げれば六代母上よ文
度者よりこもし
乳母人女房六代の命と文覚よ
げのゝ恵覚人志渡さとのし
文覚ゝ申ゝ申ゝれけるに
京ゝいりすり悲歎しめ
らんしゝく給へてゝ

給日ゝ沙門ハ人の死
しゝゝ五年覚給
よゝゝそゝ上六代ハ平氏の長孫
ゝ行ゝ色と助ゝ
人ゝ孫理とゝ
ゝ一ゝ又人の死とゝ
よ見ゝ一ほゝの人と助ゝ
さゝゝゝ出家ハからゝ一人の人
と助ゝゝ書ゝ国
文ハゝゝ位ハ
ゝ書とゝ

ゆゑ、凡人の死を救ふ。
仏心すなはち起こる。善とは行ふべし
若世人の形心よりの
つくやうに上るべし。助つさ人をとり拾
はるゝ小善の法なり。婦人の仏
とゝ大善の悟のごとくに成て重
ね自性を守り給しく。方法の妙言と
悟一切衆生の迷と衰ぬと
ゆゑ仏せ給しとを。弟子ども大善の善
とこゝろ。善導大師曰。自覚と他覚行
窮満を名付くれば此文覚ゆる

如来の本意より通徹せるゆゑ。
六代斉衡の斉衡の斉衡の
て善ゆゑ。西宮都一名
宮ゆゑ。

結曰。最後の網のゆゑ申ゆゑ。
句ゆゑ。ゆゑの死とゆゑ。
歎と憂ゆゑ。実者ゆゑ。
斉衡の中ゆゑ。
せゆゑ。ゆゑ。
なせゆゑ。
志深切ゆゑ。

将門・俊三親後ろ[illegible]
[illegible]

評曰。第一よハ豊[illegible]
よ仰[illegible]
[illegible]
[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan